

人は何をつくってきたのか、 を描く

画家
安田泰幸



「国づくりと研修」の表紙をお手伝いするようになって、もう十二年になる。最初、全国に残る土木遺産をスケッチするというお話を聞いて、「大丈夫かな、描けるかな」と思った。というのは、普段描いているスケッチの原画は小さい。ハガキの大きさか、せいぜい大きくてもその倍の大きさの紙に描いている。土木遺産というなら大きな風景だろうから、小さな紙に描き込めるかなと思ったからである。しかし同時に、土木遺産を描くということについてはとても興味があつた。以前から描き続けているスケッチは、山や海といった自然の風景よりも、街の風景やそこに住む人々の文化や生活に関するものが多い。人々が長い歴史の中で、何を考え、どのようにして、生きてきたのか…、その過程や、結果、残されてきたものを、さまざまに観察して、自分なりの絵にするのがおもしろいのだ。

実際お手伝いするようになって、その都度描く対象である土木遺産を教えてもらい、出かけてみると、当初想像していた、縁の下の力持

ち的な大規模だけど地味な遺物とはちがいが、けっこう華やかなで親しみのあるものが多い。ちまちまとしたタッチで小さな紙に描いてもそれなりに絵になる、楽しい作業になった。毎号テーマを教えてもらって描くものが決まると、現地に行く前にまず下調べをする。初めて見るもの、描くものがほとんどなので、知らなかったことが多く、どこにあるのか、いつごろ造られたものなのか、だれが、どのようにして造ったのか、なぜ造らなければならなかったのか…。調べることは多い。昨今は便利になって、昔のように調べもののために図書館通いをする必要も少なくなり、インターネットで（確かであるかどうかは別として）ある程度の情報は集められる。いもづる式に調べていくと、どんなものにも、その背景にさまざまな「ものがあり」があることが分かってくる。

つくるとい言葉には、「作る」「造る」「創る」と、いろいろ意味があるが、この行為のためには想像力が必要になる。他の動物にはない想像力をもつ人間だからこそ

できる活動ともいえる。人は原始の時代から、文明をつくり、社会をつくり、思想をつくってきた。人々は感性や知識、経験をもとに自分なりの想像力と個性を加えてあたらしいものをつくっていく。それらの集積が街であり、建築であり、生活のための道具である。当然良いものばかりではなく、間違ったものもつくる。そのようにして人々がつくり出し、使われ、残ったものが、先人の遺産として、今日生きている私たちにさまざまなことを語りかけてくれる。それを感じとり、絵として表現していくのが、楽しいし、自分の仕事だと思っている。

しかし、実際のスケッチの現場では楽しいことばかりではない。雨に降られたり、風で紙が吹き飛ばされたり、夏は暑さと汗とやぶ蚊に悩まされ、冬は寒さで手がかじかみ、思うように筆を動かせない。土木遺産は必ずしも観光地など、人々がよく行く便利などところにあるとは限らない。他に交通機関がなく、タクシーで現場に行きたはよいが、描き終わって次に行

くにも車が来なくて何時間も歩いたこともあった。地元の人も知らないものがあって、道を訊ねてもわからず、迷ったこともある。笑い話のような失敗や苦勞は絶えない。いいこともある。スケッチのため廂を借りたお宅で思いがけずお茶を出してもらったり、腰かけを出してもらったことも。子どもたちが寄ってきて、じょうずだとほめてくれることもある。

現代の複雑な社会では、価値の基準は多様で、ときにはパラダイムシフトによって、以前はよかったものが、いまはだめであったりもする。私たちはどのように行動すれば理にかなっているのか、どのようにに生活すれば楽しく、健康で、豊かになれるのか、また人のためになるのか、わからなくなることもある。そんなとき、先人が遺してくれたものを見、そのものがたりを理解することによって、どうするべきか示唆してくれることがあるように思う。そして小さな紙切れに描いたスケッチが、少しでもその役に立てばとてもうれしい。



バックナンバー▶